

三つの文学散歩

——野田宇太郎からウイキペディアタウンへ——

岡野裕行

一、はじめに

野田宇太郎（一九〇九—一九八四年）は一九五〇年末に文学散歩を考案した。坂崎重盛はこの活動を次のように評価する。

野田宇太郎の「文学散歩」は、今日、われわれが、ともすればお気楽な趣味的「文学散歩」の気分とはまったく異なり、痛恨に満ちている。ときに足早に、その地に向かい、作家の事跡に到れば茫然とたたずむ。戦争によって傷つき、失われた文芸への鎮魂の巡り歩きともいえる。

坂崎は「野田宇太郎の文学散歩」を「痛恨」「茫然」「鎮魂」と重い印象の言葉で、「われわれの文学散歩」を「お気楽」「趣味的」のような軽い印象の言葉で評価する。こういった認識は坂崎に特有のものではなく、野田の業績を特別視する評価は少なくない。とはいえ、「野田宇太郎の文学散歩」と「われわれの文学散歩」の意味するところが異なるとしても、今日では一

般にその違いが特に意識されず、いずれも単に文学散歩と呼ばれている。こういった二つの意味が文学散歩に含まれるのはなぜなのだろうか。本稿では文学散歩という用語が登場した背景を探った上で、その意味する範囲が拡張する過程を論じる。

二、文学散歩の誕生とその評価

『日本読書新聞』紙上の野田の連載「新東京文学散歩」の編集担当・長岡光郎は、その誕生経緯を次のように回想する。

この度の戦争で灰燼と化し、漸く立ち直りを始めようとする東京の姿、という意味をこめて「新東京」と銘うち、「文学的散歩」と名づけることにした。（中略）はじめの企画では、本郷・上野界隈を野田氏に頼み、浅草、銀座、などをそれぞれ別々の人に依頼するつもりであったが、野田氏と打ち合わせに入ったところ、野田氏はたいそう乗り気で、この際、東京全般をやりたいと希望され、また、自分

の親しい織田一磨画伯のスケッチを挿絵にして添えたいとのこと、そのようにお願いした。また、表題が「文学的」では堅苦しい感じがするので「的」は削つたらどうだろうという意見で、結局、「文学散歩」と決めたわけである。

野田が始めた文学散歩は、二つの過程①「まちを「歩く」こと、②「まちについて「書く」こと」の組み合わせで構成される。当初の案「文学的散歩」は、ゲウルモン『哲学的散歩』（一九三七年・『文学的散歩』（一九三八年）や宇野浩二『文学的散歩』（一九二四年）の影響があったと長岡は述べるが、その表記に堅苦しさを感じた野田は、より簡潔な文学散歩という用語を提案する^{④⑤}。野田は文学散歩への思いを次のように述べる^⑥。

私はふと近代文学が歴史化される段階と云うものを考えた。その第一は明治三十七八年の日露戦争、次は明治と云う年号の大正への改元転換時代。そして大正十二年の関東大震災。今度の大戦禍はその決定的なピリオドともなったようである。（中略）

古きものは滅びる、それは自然の理であろう。新しきものは古びる、これも自然の理である。私はよしないことを繰り返すつもりはない。滅び去ったものならば、それを蘇らせても詮ないことである。然し、それらの歴史は本当に滅び去り古び去ったものだろうか、と私は反問する。否！もし滅び去ったものだとしても、滅び去ったものを知らなければ、生々流転の法理さえ、私には納得出来そうもない。

そう思つて私はとある冬の日に、新しい東京の文学散歩を思い立った。昭和二十五年十二月某日のことである。近代文学の足跡を求めて、と云おうか、それとも、心のあとを求めてと云おうか。それはどちらでもよい。私は東京生まれではないから、懐古の情にのみ誘われて歩こうとするわけでもない。云うならば、過去を惜しむ、又、冢中枯骨を拾う代りに、冢中宝玉を求むる気持からである。

私は着古した破れ外套のポケットに黄色の鉛筆一本と、小さな手帳、それに一冊の新東京地図というのをしのばせた。これがすべてである。履き馴れた日和下駄に蝙蝠傘というあの三十六年前の「日和下駄」の雅士とはくらぶべくもない私の心と姿である。

野田の言葉には、今日の文学散歩のイメージとして広く流布している軽さはない。野田が文学散歩の著作を連載・出版し始めた頃は、占領下の検閲によって写真に使用制限があったため、イラストを使用することになったと遠藤理一は指摘する^⑦。文化破壊を恐れた野田は、東京のまちなかに点在する「近代文学の足跡」を熱意と覚悟をもつて記録に残し始める。そこに至った背景を、野田は「当時進駐軍の占領下で、日本語さえもが危うくなるような非常事態であったことも、それを書く動因であった」「文学の環境探求などと言うような悠長なことではなく、もつと根本的な日本文化の擁護、敗戦の混乱による文化破壊の防御と反抗がその目的だった」とも語っている^⑧。占領下の

非常事態は、「擁護」「防御」「反抗」「反抗」の感情を野田に芽生えさせることになったが、このような野田の語り口を現代風に言い換えるなら、文学情報のアーカイブの問題について考えていたということである。占領期まで待たずとも、野田が文化保存に強い関心を持っていたことは、東京大空襲による森鷗外の住居・観潮楼の焼失後の対応にも表れている。佐藤春夫は次のように回想する。⁹

観潮楼址を修め整へて永く記念したいという考えを具体的に抱いた人は、わたくしの知る限りでは詩人でジャアナリストを兼ねた野田宇太郎であろう。失火炎上の時からそれを云っていたが、兵火にかかってからは、白い胸像のあざやかに見られる廃園をその編輯している雑誌「藝林間歩」の口絵に掲げたり、同じ誌上で観潮楼址を記念しようと天下に呼びかけたのも彼であった。

先の引用文で、野田は関東大震災（一九二三年）にも言及している。震災前後で景観が変貌した東京のまちの様子を複数の作家で書き連ねた『大東京繁昌記（山手篇・下町篇）』（一九二八年）は、震災／戦災という違いはあるにしろ、野田の取組みに先行する作品である。まちが大規模に荒廃し、人々の間に社会的不安が増大する状況下では、その前後の個人的記録を残そうとする強い気持ちの人が人々の間に芽生えてくる。時代は異なるが、近年の阪神・淡路大震災（一九九五年）や東日本大震災（二〇一一年）の後に、まちの記録を残そうとするさまざまな震災

アーカイブが速やかにつくられた動きとも重なるだろう。¹⁰

また、永井荷風が「今日東京市中の散歩は私の身に取って生れてから今日に至る過去の生涯に対する追憶の道を辿るに外ならない。之に加うるに日々昔ながらの名所古蹟を破却して行く時勢の変遷は市中の散歩に無情悲哀の寂しい詩趣を帯びさせる」と指摘するように、まちの変貌のきっかけは大規模な戦災・震災だけでなく、日常的な「時勢の変遷」の影響も受ける。野田はまちを歩くことで自らの視点を書き留めつつ、先行する『日和下駄』『大東京繁昌記』にも言及しながら、過去の作家たちが東京のまちを記録化したことも含めて筆を進めていく。野田の文章のなかで「近代文学の足跡」が時間を超えて重層的に描かれる。木下柰太郎は「古典とは背に廻った未来である」と語り遺しており、木下に心酔する野田はこの言葉を大事にしていたとされる。野田の文学散歩は「近代文学の足跡」を辿り、それを言語化・可視化した取組みと言える。

しかし、「野田さんがおもしろい文学研究をはじめたが、『文学散歩』というのは一寸かるすぎる言葉だね」という評価を受けてしまう。¹¹野田が「擁護」「防御」「反抗」という思いを込めてみても、文学散歩は軽い言葉と見なされてしまう。このような風潮は、野田と同じように文学に絡めてまちをめぐり歩いた前田愛の業績も、「ただの文学散歩じゃないか」と酷評されたことにも表れている。¹²文学散歩という用語が広まった当時の様子を、野田は『日本近代文学大事典』で次のように説明する。¹³

文学散歩はかならずしも著書の内容説明ではなく、敗戦の灰燼に被い隠されつつあったおもに近代の詩人作家を歩き求め、それを実証することによってきめの細かな文学史を地理的に風土的に書いたものである。たまたま戦後急激に発達したマスコミがこの文学散歩を取りあげたことから流行語化し、ついに容易に古典近代現代の見境もなく文学と名のつくものを地域的に羅列するような題名盗用または模倣的書物が出版され、レジャー向きのジャーナリズムに名称を利用されるようになった。

本来、事典には客観的な記述が求められるが、「見境もなく」といった感情的な言葉がつかわれているように、野田の書き振りは主観的である。やや適正を欠く表現だが、野田が自身の考案した文学散歩の独自性を強調しようとしたことは伝わってくる。野田の指摘に見られる「模倣的書物」には、文学作品や作家のゆかりの場所を取り上げながらも、事実関係の紹介に主眼が置かれた案内記の形態が見られる。たとえば榎田満文編著『文学東京案内』（一九五六年）には、塩田良平が「世に文学散歩という言葉がもてはやされているが、本書はそれとちがつて、東京風景を著名な文学作品の叙述によって示そうとしたものである」と序文に寄稿している¹⁸。先行する文学散歩を明白に意識しながら、塩田は野田の名前をいっさい出さずに推薦文を書いている。東京案内という本の書名は明治時代にも使用例が確認できるありふれた表現だが、榎田と塩田は文学を主題とし

た案内記を押し出すことで、文学散歩との違いを強調する¹⁹。独自性を主張したいがために、本来ならば野田の名前に触れるべきところで言及を避けたような書き振りになっているが、同時代においては肯定的／否定的いずれの文脈であっても、文学散歩の存在を強く意識せざるを得なかったということだろう。

また、「題名盗用」という指摘については、高橋健二「ドイツ文学散歩」（一九五四年）や村松嘉津「巴里文学散歩」（一九五六年）などが早い時期の事例である。これらは海外の都市や作家を収録対象に取り上げているが、書名のつけ方には同時代の野田の影響が見られる²⁰。あるいは斎藤三郎は、石川啄木の生涯を辿った調査記録に『啄木文学散歩』（一九五六年）という書名をつけ、そのまえがきのなかで「啄木とその肉親の欠点短所を追求し、結果としては文学散歩というよりは、むしろ人間探求に終始したように思われる」と釈明気味に書いている²¹。書名と内容に齟齬があると著者自身も理解しながら、流行に便乗して文学散歩という用語を書名に含めた事例と言える。

後に野田は「プロムナード・リテレルを文学散歩と訳したのがそもそも私の失敗で、ジャアナリズムの成功と云うわけがあった」とも回想するが、文学散歩という用語は野田に続く模倣者たちによってその意味が上書きされたのである²²。ただし、野田が文学散歩の先導役だったことは事実だが、土屋忍が「その初発においても、そこに到るまでの経験においても、多くの人々の着想と尽力があった」²³「野田の実践が継続されたのは、

多くの賛同者がいたからである」と述べるように、野田が独力で成し遂げた成果ではなかったことにも留意したい。²⁵⁾

三、紀行文学としての文学散歩

野田は一九五一年一月に連載を開始して以降、文学散歩に関する著作を刊行し続ける²⁶⁾。特に一九五〇年代には、「東京文学散歩」に関する著作を次々に発表していたことが確認できるが、これは最初の著作『新東京文学散歩』（日本読書新聞）の時点で抱え込んでしまった問題（①調査の積み残し、②解決できずに残された疑問点、③取り扱わなかった地域が存在、④刻々と変化する東京の姿を取り込む方法の検討）があつたため、何度も決定版を試みたことによるものと藤井淑禎は説明する。行吉正一と田中実穂は、このような野田の業績を次のように評価する。

野田宇太郎の文学散歩は、一種の「紀行文学」であるといふのが一番正確であるかもしれない。様々な場所を訪れ、文学者の居住したこと、作品の舞台となったことなどを、その土地の歴史を踏まえながら記すのだが、そこに、そのとき野田宇太郎が感じ、考えたこともしっかりと記してゆく。そこには、詩人として野田宇太郎が、生きつづけている感じを受ける。野田宇太郎の「文学散歩」は、単にその地域を文学の面から紹介したものでなく、それ自体が、一編の文学作品となつているのである。

『新東京文学散歩』の本文を確認すると、たとえば硯友社跡

に佇んだ際に、「ここに、近代文学発祥地硯友社之跡とでもいふような立派な記念碑を建てて置きたいものだ」と野田の主観的な言葉が記述されている²⁹⁾。行吉・田中が指摘する通り、東京のまちを歩き回る野田の個人的な思いが書き記されていることがわかる。野田は『新東京文学散歩』の序文のなかで、「足で書く近代文学史」という表現を用いながら、より正確な文学史を書くためには次の点に注意が必要だと述べている³⁰⁾。

先ずその人間を知らねばならない。人間を知るためにはその自然と環境をも知らねばならない。私生活を理会せねばその文学を本当に理会することは出来ない。東京こそは、実に近代文学史上に名を刻んだ殆どすべての人々の私生活の場であつた。だから、東京を知らずしては近代文学の真実に触れることは出来ない——と私は考えた。

本稿では「野田宇太郎の文学散歩」に代表される文学散歩を「第一の文学散歩」と呼ぶ。これは「私」を主語とした紀行文学として書かれるため、著者自身の主観的な記述が中心となる。『日和下駄』『大東京繁昌記』なども同じく紀行文学と評価できるが、これらは文学散歩という用語の登場以前の作品であるため、「第一の文学散歩」の流れに連なる前史に位置づける。

四、案内記としての文学散歩

一方、観光目的にまちを「歩く」「書く」文学散歩もある。

これは本稿の冒頭で述べた軽さを想起させる「われわれの文学

「散歩」とも重なるもので、案内記はそのための参考資料として用いられる。本稿ではこれを「第二の文学散歩」と呼ぶ。

しかし、文作散歩に軽さが求められるようになると、野田が書き残してきた重みのある言葉は、読者のもとに届きづらくなる。その事例を一つ挙げる。高校生を対象に都内の文学散歩を実践している堀越正光は、二〇〇五年に『東京「探見」』という案内記を出版する。堀越は同書の巻末に参考文献一覧として五五点に及ぶ資料を記しているが、そこに一九五〇～六〇年代に野田が公刊した著作を一冊も含めていない。戦前の本として、唯一『瓦版のはやり唄』（一九二六年）を挙げているが、そのほかはいずれも一九七〇～二〇〇〇年代までの本である。堀越の想定する読者層が高校生であることを考慮すれば、案内記としての軽さが求められる「第二の文学散歩」では、紀行文学のような主観的記述の重要性は低下してしまうのだろう。⁽³³⁾

『新東京文学散歩』は「私」を主語として野田自身の見解を述べる内容となっており、まちを歩き回る主体が著者自身であることが明示されている。一方、前述した榎田の『文学東京案内』では、「歌舞伎座の前通りけり初芝居 正岡子規」という俳句の紹介と、「興行師千葉勝五郎と組んだ福地桜痴が、改良演劇の劇場として木挽町に建てた歌舞伎座は、明治二十二年十一月に開場しました」という事実解説文が併記される。そのほかにも「帝国劇場は」「日比谷公園は」などのように、建物や土地を主語としてその客観的事実を示す部分と、さまざまな作

家の小説作品の断片や詩をそのまま引用した部分がそれぞれ半分ずつを占め、著者自身の見解は本文中に記されない。東京のまちを題材に自らの考えを語る野田と、まちに関する事実解説的な情報を示そうとする榎田の執筆方法の違いは明白である。

また、『新東京文学散歩』には野田自身の詩も本文のなかに何度も挿入されるが、これはもともと詩人として活躍していた野田ならではの表現方法だろう。参考文献をもとに事実解説をする案内記は、調査さえできれば一般の人でもある程度のもので書けるだろうが、通説に耐えうる紀行文学を書くことは簡単な話ではない。たとえば寺田寅彦は次のように書いている。⁽³⁴⁾

案内記が系統的に完備しているという事と、それが読む人の感興をひくという事とは全然別な事で、むしろ往々相容れないような傾向がある。いわゆる案内記の無味乾燥なのに反して優れた文学者の自由な紀行文やあるいは鋭い科学者の纏まらない観察記は、それがいかに狭い範囲の題材に限られていても、その中に躍動している活きた体験から流露するあるものは、直接に読者の胸にしみ込む、そしてたとえそれが間違っている場合でさえも、書いた人の真を求める魂だけは力強く読者に訴え、読者自身の胸裡にある同じようなものに火をつける。そうして誌された内容とは無関係にそこに取扱われている土地その物に対する興味と愛着を呼び起す。

事実関係の記述は観光の役には立つかもしれないが、それら

案内記は「無味乾燥」と寺田は酷評し、「優れた文学者」や「鋭い科学者」が書く文章との質の違いを強調する。川本三郎は『日和下駄』の解説文のなかで、「散歩は荷風にとつては、きわめて孤独な文学的行為だったといえるし、また、徹底した一人、個の意識に支えられていたという点で、町の隠居の散歩とは明らかに違った近代人の知的行為でもあった」と指摘するが、これはそのまま野田の実践にも通じる捉え方だろう。荷風の『日和下駄』の時代からさらに時間が経過し、戦災によって変貌した東京の風景に残る文学的風景を、野田は自らの「文学的行為」「知的行為」である文学散歩によって残そうと試みたのである。

紀行文学という形式の「第一の文学散歩」は、あくまでも野田が個人的な思いから始めた活動である。それに對し、「第二の文学散歩」は他者と体験を共有するイベントとして企画され、案内役と案内される側の参加者が協働でつくり上げるものである。文学散歩の先駆者として有名になった野田には、やがて「第二の文学散歩」の案内役も期待されるようになる。土屋が「文学散歩を企画し実践するということは、文学を立体的に演出するプロデューサーになることであり、舞台上で作品を演じる役者になることである。同じプログラムであっても、人によって演奏は異なり、観客によって演奏も異なったものになる」と述べるように、文学散歩の案内役の仕事は簡単には務まらない。³⁷既に実績のある野田に依頼がなされるのは当然の成り行きだろう。このような社会からの要請に對し、「私には近頃

妙な別名が第三者によって付けられているようである。散歩やさん、文学巡礼者。甚だ面白くない名前だと云わざるを得ない」と野田は不満げに回想する。そういつた野田の気持ちを押し流しながら、文学散歩のアイデアは戦後の日本社会に模倣者を生み出し、誰もが取り組むことができる公共財へと変化する。³⁸松下浩幸は文学散歩について、「文学作品に触れる面白さは勿論、言葉だけを対象にした場合でも得ることは出来るだろう。だが今、重要なことは、近代文学の作品が読者を失いつつある現在、面白さに触れることのできる回路は、多様な方がいいということである」と、回路の多様性という視点を提示する。良い取組みや面白い活動は模倣者を生み出す力がある。つまり考案者である野田の手を離れ、模倣者がそれに続いたからこそ文学散歩が社会に広まり、各地に定着したと評価できる。

そのほか、舛谷鏡は「文学散歩の現在における実践は、まちづくりと教育という、観光研究にも関わりを持つ場面で行われている」と述べた上で、①自治体や作家関係者による文学館の設立、②中高等学校の教員らによる文学散歩の実践、などへの影響を指摘する。⁴¹また、渡辺裕は「文学散歩は、作品を現実の都市と結びつけ、重ね合わせる体験を提供してくれるきわめて生産的な場である」「小説が単なる虚構の世界をこえて、現実の都市やその歴史についてのわれわれの表象の欠かせない要素となつている」と指摘しつつ、文学散歩の取組みが「現実の場所と小説とを媒介する装置」として機能し、私たちに刻み込まれ

た「都市の記憶」の一面を浮き彫りにすると述べる。⁽⁴²⁾このように「第二の文学散歩」では、案内記を「書く」作業を案内役が引き受け、実際にまちを「歩く」取組みについては、複数の参加者と時間を共有しながら実施する。そしてまた、観光学やコンテンツツーリズムとも結びつきやすいという特徴も見られる。

五、百科事典としての文学散歩

そしてインターネットが普及した現在、新しい形の文学散歩が出現している。本稿ではこれを「第三の文学散歩」と呼ぶ。この背景には、昨今の図書館をめぐる三つの動向の影響がある。

一つ目は、公共図書館において地域資料の積極的な収集・保存・活用の動きが強まっていることである。たとえば二〇〇六年の文部科学省「これからの図書館像」や、二〇一二年の「図書館の設置及び運営上の望ましい基準」⁽⁴³⁾などには、地域資料の収集・保存とその有効活用が提言されている。⁽⁴⁴⁾当然ながらこれらには、各地域の郷土作家に関する文学情報も含まれる。

二つ目は、松本秀人が「図書館は、地域住民の営みを記録し、地域文化や伝統を資料として保存し、信頼できる地域情報を観光者に提供できる機関」と指摘するように、昨今の公共図書館が地域資料の積極的活用を観光視点から進めている点である。⁽⁴⁵⁾

このような提言は、戦前の和田萬吉や戦後の南益行にも見られる。⁽⁴⁶⁾南は野田と同時代に、「广大無辺な世界の観光資源から一地域の自然風土にいたるまで、人類は永遠に散策する。その行

く先々の史蹟を物語る資料や風土保全に関する計画書などの観光資料は、必ず旅人を満足させる」とその重要性を指摘する。⁽⁴⁷⁾

三つ目は、地域の文化情報資源の記事を更新し合うウィキペディアタウンの取組みが実施され始めたことである。⁽⁴⁸⁾ウィキペディアは誰でも編集・参照可能なインターネット上の百科事典であるが、その更新作業には記述した内容の根拠となる出典の明記が不可欠なことから、地域資料を所蔵する図書館や博物館がその調査・執筆に利用される。また、まち歩きによって記事に関連した事物の写真を自ら撮影し、権利関係を明示した自由利用可能な素材を得るとともに、現地を訪れた体験の共有は書くことへのモチベーションともなるため、野田と同様に「歩く」「書く」の組み合わせによって実施される。その後、「酒ペディア」「ウィキギャップ」などのテーマ別の編集イベントも発展的に行われるようになった。⁽⁴⁹⁾そして二〇一八年以降には、「文学に関する記事を充実させる」ことを目的とした「Wikipediaブンガク」が、神奈川県近代文学館や神奈川県立図書館を会場として実施されるようになった。⁽⁵⁰⁾当該イベントでは、これまでに「山川方夫」「寺山修司」「松本清張」「中島敦」「大岡昇平」などの人名記事、「愛のごとく」「毛皮のマリー」「砂の器」「山月記」「野火」などの作品記事、「横浜学園高等学校」「兵士・庶民の戦争資料館」「雑誌『新青年』」などの作家関連記事が新規／加筆項目として編集されている。

以上のことは、公共図書館がまちの地域資料を残し、さらに

観光者に対する情報提供という観点とも結びついた先に、それらをウイキペディアというツールを用いて情報共有するという流れとして整理できる。つまり公共図書館が長年にわたって蓄積してきた地域資料の収集・保存・活用の流れと、野田が開始した後に全国各地に広まってきた文学散歩という取組みが、近年のウェブの発達とウイキペディアタウンという具体的な方法の確立により、両者の目指す理念が重なった領域に「第三の文学散歩」が位置づけられるということである。「第一の文学散歩」が紀行文学の形式で個人的な記録を残すこと（アーカイブ）を目指し、「第二の文学散歩」が案内記（ガイドブック）としての性質を指向するものならば、「第三の文学散歩」は誰でも参照可能な百科事典（エンサイクロペディア）の編集・共有としての機能の確立を試みようとするものと言えるだろう。「第三の文学散歩」の成果として百科事典に書き込まれる文学情報には、文学作家と土地との結びつき（どこで生まれ、どこで成長し、どこで暮らし、どこで亡くなったのか）や、文学作家と時間との関係（いつ何を食べ、いつ誰と会い、いつ何を書いたのか）なども含まれる。作家に関する正確な事実関係とは、「いつ・どこで」という情報を特定し、それらを共有化することである。渡邊英徳はこのような「いつ・どこで」に関する情報を「時空間メタデータ」と呼んだ上で、それらの情報は人々の社会的・政治的な立場の違いを乗り越え、フラットで公平な共存関係が構築できると指摘する。⁵³この考え方を敷衍すれば、文学作家が「いつ・

どこで」何をしていたのかという情報も、同様にフラットで公平なものとなることができ。紙の本では共存できなかった情報同士であつても、「第三の文学散歩」による編集過程を経れば、それらをウェブ上の百科事典（ウイキペディア）という commons に掲載することで相互の関連づけが可能となる。⁵⁴

六、「歩く」こと・「書く」こと・「語る」こと

野田の取組みについて、川本三郎は次のように評価する。⁵⁵

文学テキストの分析が重視されるアカデミズムの世界では文学散歩を軽視するきらいがある。「単なる文学散歩ではなく」という紋切型のフレーズがあるくらいである。しかしまず現場を知らなくては話にならない。隅田川と荒川の区別も出来ない人間が荷風を文字面だけで論じても迫力はない。野田宇太郎の出発点にはまず現場を押さえておくという基礎作業への想いがあった。（中略）確かにいま読むと文豪崇拜、文学至上主義のきらいがあるかもしれない。昔は良かったという感傷が強いかもしれない。しかし、この時点では、漱石も鷗外も、荷風も鏡花も、古い文学として忘れられてしまう可能性があったのである。だから『文学遺跡』の有無に一喜一憂する散歩者の想いを否定することは出来ない。何よりもこれだけ具体的に町を歩き、場所をひとつひとつ確認していくという実証性の迫力には圧倒されざるを得ない。「単なる文学散歩ではなく」など

といっている連中も、実は黙ってこういう文学散歩の成果を使っているのである。

川本の指摘は安易なアイデア盗用・模倣に対する批判であり、事実を確認する野田の実証的な取組みを高く評価するものである。前述した野田の指摘にあった「題名盗用」「模倣的書物」が跋扈する状況を見れば、「第一の文学散歩」を「第二の文学散歩」の意味に置き換える動きは簡単に顔を出してくることがわかる。これは創作行為を伴う紀行文学としての「第一の文学散歩」よりも、事実を調べて客観的に記す案内記としての「第二の文学散歩」のほうが比較的執筆しやすいためだろう。川本と同様に、中村良之も次のように野田を高く評価する。⁵⁶

今日、専門家でもない一般の文学好きの人々が、文学作品の舞台となった郷土を誇りに思い、郷土出身の文学者を誇りに思うのは、野田の「文学散歩」あつたればこそなのである。また今日、地方公共団体がさまざまな文学館を造り、そこには文学好きの老若男女が大勢訪れています。それもまた、風土の文学の関係を、地道に足を使って証明し続けた野田の活動を抜きに語ることはできません。

本稿ではウイキペディアタウンを「第三の文学散歩」として文学散歩の流れに位置づけたが、ウイキペディアの編集作業においては、参照した出典の記述をそのまま引用するのではなく、内容を咀嚼した上で自分の言葉として解説文を書くというルールになっている。執筆者が独自の観点で記事を書くウイキ

ペディアの仕組みは編集著作物と呼ばれるものであり、そこには創作的な意味も含まれる。項目の選択や記述方針、出典の取捨選択など、そこには執筆者による主観的な判断も必要とされる。野田を始めとして多くの人たちが残した膨大な文学散歩の成果を「黙って使う」ことなく、出典として明示しながら、百科事典の解説文という形でウイキペディアに文学情報に関する言葉を蓄積することができる。ウイキペディアタウンの登場以前の一九九六年に、横山吉男はまちを「歩く」「見る」「学習する」という過程を経た上で、その記録をまとめて「書く」作業まで進めることが文学散歩には重要だと指摘している。⁵⁷ 出典となる文献を図書館の地域資料から探し出し、ほかの文献と結びつけて相互に関連させながら自分の言葉で文章をまとめていくウイキペディアタウンの普及は、ウェブ技術の発達によって横山の提言が実現化する過程の延長線上にあるだろう。

また、こうしたアーカイブの作成に関わることの意義として、渡邊が「自分の関わったものは、まずみてみたくなるし、さらに人につたえたくなるものです。こうして、新たな語り部が生まれます」と指摘するように、「書く」の先には「語る」過程がある。さらに渡邊は、「ナガサキ・アーカイブ」「ヒロシマ・アーカイブ」「東日本大震災アーカイブ」などの作品をつくり上げた経験に触れながら、過去の戦災・震災被害の記憶を振り返り、それらを未来に伝え残す活動を続けることで、「記憶のコミュニティ」(さまざまな世代や立場にいる人々が集まる運

「物体」が創出されると指摘する。つまり「第三の文学散歩」の目的は、公共性を帯びた言葉を多くの参加者とともに探り合い、それらをウェブに蓄積して共有化を図り、「記憶のコミュニティ」をつくり上げることである。坂崎は野田の文学散歩の成果を踏まえながら、「都市の『物語』は、そこに志ある人がいれば、常によりがえり、生きつづける」と評価する。これはデジタルアーカイブの活用によって「語り部」を増やすことの重要性を説く渡邊の主張とも重なる。文学散歩とは「歩く」「書く」行為の先に、私たちが文学を「語る」ための機会をつくらうとする取組みである。

「第三の文学散歩」が到来した今日においては、ウィキペディアタウンを実施する際に参照可能な地域資料の数を、相互に比較検討できる程度まで揃えなければならない。そしてその数を増やすためには、可能な限り多くの書き手や語り部が関わることで、それぞれの地域を題材とした本や記事として記録に残さなければならぬ。野田自身は「題名盗用」「模倣的書物」と否定的に評価していたように、個人レベルでは納得できなかった。ただ、文学散歩の先駆者としてのアイデアが模倣されることは、社会レベルで見れば有益なことと言える。その点で野田の取組みは、戦後の日本社会に文学散歩の模倣者を次々と生み出したことにも功績があったと評価できる。

一方、こういった文学散歩も含めた文学研究・市民講座・講演会などの機会を設けることの社会的な評価について、土屋が

「文学・文化の表面をなぞった観光資源化」「ご都合主義的な郷土の偉人づくり」と批判している論点も重要である。土屋はこのような地域文化を無自覚に良いものとして語ることの危険性を指摘し、自己批評的に「居心地の悪さ」があると表現している。文学散歩の取組みには、単に地域の話題づくりとして消費されてしまう懸念が残ってしまうわけである。

しかし、単なる消費的な話題づくりではなく、多様な人たちが「語る」ための情報を蓄積するための百科事典の編集作業と捉え直せば違った形として見えてくる。たとえば松下は「都市を歩くことで得られる気づきは、書物を読むことで得られる気づきとバラレルであるはずだ。体験の幅を広げることは、認識の幅を広げることに通じる。体験で得た認識はやがて物語からの気づきを我々に与えてくれるだろう」と論じた上で、文学散歩という体験が文学に「智慧のいずみ」としての意味をもたらすと指摘する。松下の指摘は、前述した「第二の文学散歩」の効果も指摘するものである。また、日下九八は「公表済み知識の集合体である百科事典の存在は、あらゆる市民・住人が、個々の幸福を追求し政策決定に関与する上で、前提となる知識・教養を獲得するための公共的な知識のインフラとしても意味を持つ」と述べている。日下の意見は「第三の文学散歩」の特徴を捉えているものと言えるが、その土地と文学とのつながりを探るために実際にまちを歩き、不足する情報を補うために文献を調べ、百科事典の用語の説明文を自分の言葉で記述し、ウィキ

ペディアの更新作業を行うことは、公共的な情報インフラのなかに文学情報を組み込んでいくには有効な方法だろう。

日下と松下の意見をかけ合わせると、「知識のインフラ」としてのウィキペディアと「智慧のいずみ」としての文学には、いずれにも文学散歩という取組みとの関係が見られる。坂崎が「お気楽」「趣味的」という言葉でその特徴を指摘していたように、「第二の文学散歩」は確かに消費的な行為にも見えるかもしれない。しかし、「第三の文学散歩」という視点を提示すれば、文学情報をウェブ上の百科事典に記述し、未来につなげる言葉を蓄積していく公共的な活動と捉え直すことができる。

七、「私」の文学散歩から「私たち」の文学散歩へ

最後に、①目的（何を実現したかったのか）、②喪失（何ができなくなったのか）、という観点から文学散歩の特徴を整理する。

まずは文学散歩の目的の違いを述べる。「第一の文学散歩」の目的は、まちの文学的記録を書き残すために「紀行文学を書き残すことである。これは個人的な文学体験の記録化（文学アーカイブ）であり、そこには個人が過去へと向き合うまなざしが強く表れることになる。一方、「第二の文学散歩」の目的は、案内者が同時代に生きる他者に対してまちを舞台とした文学案内（ガイドランス）を行うことである。案内者とは、「現時点で見聞可能な文学的空間」と「現時点で対話ができる同時代の人々」をつなぐ役割を意識しており、そこには徹底して現在に向き合

うまなざしがある。そのため、「第二の文学散歩」では、同時代に見聞きできる文学的空間や文学に関するできごとの記録を目的とした案内記（ガイドブック）がつくられることになる。

そして「第三の文学散歩」では、「記憶のコミュニティ」となる文学アーカイブを百科事典に盛り込むことで、未来に生きる人たちのためにまちの言葉を伝え遺そうとする。そこには公共性を意識した未来へのまなざしが表現されることになる。

また、文学散歩の発達によって喪失したものもある。これは「第一の文学散歩」から「第二の文学散歩」への移行にあたっては、個人的・主観的な言葉によるまちの記録化（アーカイブ化）を促す力が失われるとともに、まちを案内する（他者のために文学情報の事実関係を整理する）力が強まるという特徴が見られる。「第二の文学散歩」とは、案内者自身が調べた事実をもとにして、「まちをどのように歩けば良いのか」という視点を参加者に提示するものであるため、主観的な言葉よりも客観的な事実が重要視される。そして「第三の文学散歩」へと変化する過程では、「第一の文学散歩」に見られた散歩者独自の視点（私）による記述が失われる一方で、より俯瞰した異なるレベル（私たち）での百科事典としての記述へと移行するという特徴がある。言い換えれば、「第一の文学散歩」では「私はこのようにまちを眺めた」という主観的な言葉が、「第二の文学散歩」では「私はまちについてこのような事実を調べた」という客観的な事実が、「第三の文学散歩」では「私たちのまちに

はこのような文学情報がある」というように、公共性を帯びた言葉によって「私たち」の記録を語り残そうとするものである。渡邊の言う「記憶のコミュニティ」とは、「私」の個人的な話を共有し、「私たち」の話へと変えることで生み出される。

野田が考案した文学散歩は、まちの文化を残すための「私」の苦闘に始まり（第一の文学散歩）、やがて観光へと応用する模倣者を生み出した（第二の文学散歩）。そして今日の文学散歩は、それらさまざまな人たちの多様な関わり方を包摂しながら、あらゆる文献を活用し、情報を共有する「私たち」の百科事典の構築へと進んでいる（第三の文学散歩）。「第三の文学散歩」に関わる人たち（ウイキペディア）もまた、文学情報を未来に残そうと苦闘し、ウイキペディアに記述を加えるためにさまざまの文献を探し求めている。野田が生涯追いつ求めた「近代文学の足跡」をも包含しながら、文学アーカイブの編集作業とその活用を継続することが私たちには求められるだろう。そしてまた、前田愛『文学の街』の解説のなかで小森陽一が「歩行する読者」「歩行しなごしつづける読者」と指摘するように、自分たちのまちをどのように眺めるかという問題意識は、読者である私たち自身も持ち続けなければならないだろう。

注(1) 野田宇太郎文学資料館編『野田宇太郎略年譜』『背に廻った未来』野田宇太郎文学資料館、二〇〇二年十二月、一八一―一八七頁

- (2) 坂崎重盛「『新東京文学散歩』を巡りて」『新東京文学散歩 上野から麻布まで』（講談社文芸文庫）、野田宇太郎著、講談社、二〇一五年二月、二七七―二八五頁
- (3) 長岡光郎「『文学散歩』誕生の記」『東京ハイカラ散歩』（ラントリーエ叢書17）、野田宇太郎著、角川春樹事務所、一九九八年五月、二七〇―二七四頁
- (4) グウルモン『文学的散歩』は一九三八年に春秋社より刊行された後、一九四一年に『文学散歩』と改題の上再刊された。内容は哲学思想書であり、言葉のつかい方が野田と異なる。
- (5) 宇野浩二著『文学的散歩』は一九二四年に新潮社から刊行された作品であり、一九四二年に改造社から再刊された。
- (6) 野田宇太郎「かどで」『新東京文学散歩』日本読書新聞、一九五一年六月、三―六頁
- (7) 遠藤理一「リカバ・ジャパン／デイスカバ・ジャパン―野田宇太郎の文学散歩と占領期の「風景」―」『文化／批評』第七号、二〇一六年三月、三―二一頁
- (8) 野田宇太郎「文学の環境探求の必要性」『國文學 解釈と教材の研究』第一二巻一二号、一九六六年十月、一四―一七頁
- (9) 佐藤春夫「観潮楼附近」『観潮楼附近』三笠書房、一九五七年五月、一五三―二二二頁
- (10) 東京日日新聞社編『大東京繁昌記 下町篇』春秋社、一九二八年九月／『大東京繁昌記 山手編』同年十二月
- (11) 「神戸大学附属図書館震災文庫」『国立国会図書館東日本大震災アーカイブ』「saveMLAK」などの事例がある。
- (12) 永井荷風「第一 日和下駄」『日和下駄』（講談社文芸文庫）、

- 講談社、一九九九年十月、一三〇―二三頁
- (13) たとえば野田は神楽坂を歩いた際の文章で、加能作次郎「早稲田神楽坂」(『大東京繁昌記 山手篇』)に言及している。
- (14) 前掲(6)、「序」一〇七頁
- (15) 前掲(1)、「中村良之「野田宇太郎の世界」第一章 上京まで」二〇〇―四四頁
- (16) 小森陽一「解説 風景に呼びかける言葉」『文学の街 ―名の舞台を歩く―』(小学館ライブラリー)、前田愛著、小学館、一九九一年十二月、二七七―二八〇頁
- (17) 野田宇太郎「文学散歩」『日本近代文学大事典 第四卷』日本近代文学館編、講談社、一九七七年十一月、四六一頁
- (18) 塩田良平「序」『文学東京案内』槌田満文編著、緑地社、一九五六年三月、三―四頁
- (19) 文学に特化した内容ではないが、このほかに木村毅「東京案内記」(一九五一年)、東京都観光協会編『東京案内記』(一九五六年)などの本も確認できる。前者には荷風・芥川らの作品からの引用、後者には荷風・独歩・啄木らの名前へ言及するなど、文学に関する内容をその一部に収録している。
- (20) 高橋健二「ドイツ文学散歩」新潮社、一九五四年七月
- (21) 村松嘉津「巴里文学散歩」白水社、一九五六年九月
- (22) 後に高橋と村松は、野田が一九六一―六五年まで編集・発行していた雑誌『文学散歩』(全二五巻)に寄稿・連載するなど、活動の理念を共有するようになる。
- 岡野裕行「野田宇太郎と雑誌『文学散歩』総目次」『皇學館論叢』第五四卷四号、二〇二二年一月、一三七―一五四頁
- (23) 斎藤三郎「まえがき」『啄木文学散歩 ―啄木遺跡を探る―』角川書店、一九五六年十一月、五―七頁
- (24) 野田宇太郎「あとがき」『新東京文学散歩 続篇』(角川文庫)、角川書店、一九五三年五月、二三六―二三八頁
- (25) 土屋忍「文学散歩」論』『昭和文学研究』第七五集、二〇一七年九月、二九―四三頁
- (26) 野田による文学散歩関連本は、東京を対象とした一九五一年の『新東京文学散歩』に始まり、一九五四年の『アルバム 東京文学散歩』『東京文学散歩の手帖』などがそれに続く。さらに一九五三―五四年の『九州文学散歩 正篇・続篇』、一九五五年の『湘南伊豆文学散歩』、一九五七年の『関西文学散歩 全三巻』、一九五八年の『四国文学散歩 愛媛』など、全国各地に調査対象を広げ、一九六〇年の『定本文学散歩全集 全一三巻』を経て、一九七七―八五年の『野田宇太郎文学散歩 全二八巻』へと結実した。これら一連の著作は、全国各地に文学散歩の愛好者・愛好団体が増加する原動力にもなった。
- (27) 藤井淑禎「毎日新聞連載「東京文学散歩(ところどころ)」前後の野田宇太郎」『センター通信 立教大学江戸川乱歩記念大衆文研究センター』第九号、二〇一五年三月、一―四頁
- (28) 行吉正一、田中実穂「文学散歩という方法 ―漱石文学散歩の記録―」『東京都江戸東京博物館紀要』第一号、二〇一一年三月、一一三―一五八頁
- (29) 前掲(6)、「硯友社跡」一四九―一五五頁
- (30) 前掲(6)、「序」一〇七頁
- (31) たとえば平凡社ライブラリー版『大東京繁昌記 下町篇』

- (二九九八年)の表紙に「文学散歩」と説明書きがあり、野田以前の著作に文学散歩という用語を適及的に使用している。
- (32) 堀越の著作はサブタイトルに文学散歩と記されているが、その先駆者である野田の名前には言及していない。
堀越正光『東京「探見」——現役高校教師が案内する東京文学散歩——』宝島社、二〇〇五年五月、一三三頁
- (33) 堀越は後に物語散歩という用語を提唱し、あくまでも文学作品に登場する作品舞台を対象を絞る方向に発展させることで、野田の文学散歩との違いを強調するようになる。
堀越正光『あの本の主人公と歩く東京物語散歩100』ペリかん社、二〇一八年九月、二二二頁
- (34) 堀越に先行する前田愛は、自身の著作で「作品のなかに描かれた都市を復原して行くところに狙いがある」という手法を見出したが、「野田氏の行き方とはべつの文学散歩」とも述べるように、先駆者である野田に言及してその業績に敬意を払いつつ、あくまでも文学散歩の範疇に留まろうとしている。
参照は前掲(16)、「初版あとがき」二七四〜二七六頁
- (35) 寺田寅彦「案内者」『寺田寅彦全集 文学篇第二卷』岩波書店、一九三七年三月、二二四〜二四〇頁
- (36) 前掲(12)、川本三郎「解説 路地を歩く」一八九〜二〇〇頁
- (37) 前掲(25)
- (38) 前掲(24)
- (39) 後に野田は「文学散歩友の会」を組織し、会報として雑誌『文学散歩』の編集・発行を続けた。同誌には友の会と提携した旅館やバス会社の広告をたびたび掲載するなど、野田は「第二の文学散歩」を積極的に実施する側となる。
- (40) 松下浩幸「〈可能性〉としての文学散歩——野田宇太郎、前田愛、そして樋口一葉——」『論集樋口一葉V』樋口一葉研究会編、おうふう、二〇一七年三月、二二四〜二三二頁
- (41) 舛谷鏡「観光研究としての文学散歩」『立教大学観光学部紀要』第二〇号、二〇一八年三月、九五〜九九頁
- (42) 渡辺裕「第一章『文学散歩』ガイドブックのひらく世界」『まちあるき文化考——交又する〈都市〉と〈物語〉——』春秋社、二〇一九年三月、三一〜七三頁
- (43) 吉見は渡辺の言説の意図を、「街歩きが単なる物語の追体験以上のもの」「作品を通じた集合的記憶」と説明している。
吉見俊哉「はじめに」『東京裏返し——社会学的街歩きガイド——』(集英社新書、集英社、二〇二〇年八月、六〜二六頁)
- (44) 蛭田廣一「地域資料サービスの実践」(JLA図書館実践シリーズ41)、日本図書館協会、二〇一九年八月、二五七頁
- (45) 文部科学省「これからの図書館像——地域を支える情報拠点をめざして——」文部科学省、二〇〇六年三月、九四頁
- (46) 文部科学省「図書館の設置及び運営上の望ましい基準」文部科学省、二〇一二年十二月
- (47) 松本秀人「図書館と観光——その融合がもたらすもの——」『カレントアウェアネス』第三〇六号、二〇一〇年十二月、<https://currentdl.go.jp/cal1729>
- (48) 「半世紀以上も前に提唱されていた、観光と図書館」『観光文化』第二四三号、二〇一九年十月、三九頁
- (49) 南益行「観光図書館論」『図書館界』第六卷三三号、一九五四

- 年六月、一〇九〜一一〇頁
- (50) ウィキペディアタウンとは、参加者がまちをめぐり歩いて文化財や観光名所を写真に収めた後、地域資料を活用して解説記事を執筆し、ウィキペディアを編集するイベントのこと。
- (51) 「ウィキギャップ」とは、男女格差の解消/ジェンダー平等を目的としたキャンペーンの一つであり、女性に関する記事を増やそうとする編集イベントのこと。
- (52) 田子環「文学に特化した日本初の試み『Wikipediaブンガク』」『ライブラリー・リソース・ガイド』第二五号、二〇一九年一月、一〇〇〜一〇一頁
- (53) 渡邊英徳「第五章 ヒロシマ・アーカイブ」『データを紡いで社会につなぐーデジタルアーカイブのつくり方』（講談社現代新書）、講談社、二〇一三年十一月、一四九〜一九二頁
- (54) ウィキメディア財団では、ウィキペディアの姉妹プロジェクトとして、誰でも自由に利用できる画像・音声・動画を掲載する「ウィキメディア・コモンズ」も提供している。
- (55) 前掲(3)、川本三郎「解説 風景の向こうにある東京」二七五〜二八二頁
- (56) 前掲(1)、中村良之「野田宇太郎の世界 第六章 光と影」一四九〜一五五頁
- (57) 横山吉男「はじめに」『多摩文学散歩ー文学碑・墓碑を歩くー』有峰書店新社、一九九六年十二月、二〜三頁
- (58) 前掲(53)
- (59) 坂崎重盛「東京文学散歩ー隅田川」野田宇太郎『東京本遊覧記』晶文社、二〇〇二年三月、二二〜二三頁
- (60) 土屋忍「はじめに」『武蔵野文化を学ぶ人のために』世界思想社、二〇一四年七月、二〜九頁
- (61) 前掲(40)
- (62) 日下九八「ウィキペディアーその信頼性と社会的役割ー」『情報管理』第五五巻一号、二〇二二年四月、二〜一二頁
- (63) 福島はウィキペディアタウンについて、①著作権等の目的「文化の発展に寄与」への理解の更新、②各種動向に関する情報の収集方法の検討、③所蔵資料を拓く手段の模索、などの課題を指摘しながら、特にMLA(博物館・図書館・文書館)関係者による積極的なコミットを促している。
- 福島幸宏「ウィキペディアタウンをMLAの立場から考える」『マガジン航』二〇一七年七月十一日、<https://magazine-k.jp/2017/07/11/wikipedia-town-for-mla/>
- (64) 前掲(16)
- 【キーワード】文学散歩、野田宇太郎、ウィキペディアタウン、アーカイブ、案内記
(おかの・ひろゆき/皇學館大学)